

## 「印西市域の庚申塔と女人講の石塔」

巖 由美 (房総石造文化財研究会会員)

印西市域、特に旧印西町は、北総の中でも石造物の宝庫で、昭和 53 年から 15 年間かけて印西町が調査した数は、3056 基の多きに達しています。その中でも特に、庚申塔が 366 基、十九夜塔などの月待塔が 310 基、子安塔が 129 基など、地域の民間信仰の講に関連する石仏・石塔は、総数の約 3 分の 1 を占めます。

これらの石塔石仏の概要を、旧印旛村・本埜村の事例も交えてご紹介したいと思います。

### (1) 印西市域の庚申塔

庚申塔は、最も普遍的で数も多く、近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物です。

庚申待は、六十日に一回庚申の夜に、眠った人間の体から三尸が抜け出し天帝にその人の罪過を告げられないよう徹夜するという道教に由来した信仰で、室町時代ごろから庶民にも浸透して庚申講が行われるようになる、その供養の証しとして「庚申塔」(庚申供養塔)を建立する風習が、江戸時代に、各地に定着しました。

近世庚申塔の関東における初出は、元和 9 年(1623)の足立区正覚院の弥陀三尊来迎塔と三郷市常楽寺の山王廿一社文字塔、千葉県最古は松戸市幸谷観音境内の寛永 2 年(1625)の山王廿一社文字塔です。

下総地域への伝播は、江戸川に接する東葛地域からと推定され、印西市域では、寛文元年(1661)銘の、台座に三猿が刻まれた聖観音立像塔が竹袋観音堂に建てられるなど、1660 年前後に、像容は三猿や諸仏の彫像、文字のみの供養塔などいろいろな形態の庚申塔が普及していきます。

青面金剛像を主尊に彫った庚申塔が現れるのは、寛文 11 年(1671)銘の小林の砂田庚申堂の四臂の青面金剛像塔からで、その後は六臂の凝った青面金剛像の庚申塔が建てられていきますが、江戸中期、青面金剛像塔が数的にも最盛期になる享保から宝暦年間にかけて、印西市域を中心に白井市や船橋市の東部、我孫子市・柏市・栄町では、画一的な特徴\*の庚申塔が、期間と地域を限定して数多く建てられました。

(\*主尊の目がアーモンド形で、右手に鈴状または人の頭部らしき袋状のものをもち、宝輪を持つ手が直角で水平に伸び、迫力がない邪鬼がうづくまる姿、三猿は中央が前向き、左右が中央に対しての横向き。)



Fig.1 足立区正覚院の  
弥陀三尊来迎塔 (1623)



Fig.2 竹袋観音堂  
三猿付聖観音立像 (1661)

・旧印西市内の庚申塔

江戸前期：観音像や地藏像、阿弥陀如来像などの諸仏や、銘文のみに三猿を彫ったものが多い。

竹袋観音堂の寛文元年（1661）銘 = 聖観音立像、台座に三猿が浮彫り。前頁右下 Fig.2

武西百庚申の隣の寛文10年（1670）銘 = 「奉待庚申供養」と天蓋付三猿。Fig.4

砂田庚申堂内 寛文11年（1671）銘 = 四臂の青面金剛像 Fig.5

大森長楽寺の天和3年（1683）銘 = 「奉起立庚申待成就之由」の文字と三猿 Fig.3の右端



Fig.3 大森長楽寺（左\*1763=江戸中期の画一的な特徴\*）・（中央：1715）・（右：1683）



Fig.4 武西（1670）

江戸中期：「二世安楽」を祈願し、青面金剛像を浮彫りするのが庚申塔の最盛期の主流。

上町観音堂の元禄13年銘（1700）銘 = 青面金剛像の笠付塔で道標を兼ねる

大森長楽寺の正徳5年（1715）銘 = 青面金剛像に2童子2仁王2鬼、三猿。Fig.3の中央

結縁寺青年館の享保17年（1732）銘 = 青面金剛像に笠付の典型的な庚申塔 Fig.6



Fig.5 砂田（1671）



Fig.6 結縁寺（1732）



Fig.7 押付（1675）



Fig.8 物木（1686）

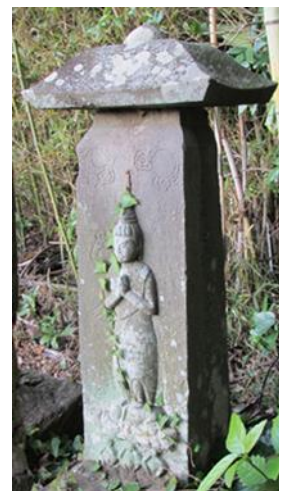


Fig.9 造谷（1706）

・旧本埜村の古い庚申塔

押付 4 水神社 延宝 3 年 (1675) = 駒型 三猿 Fig.7

物木 317 庚申塚 貞享 3 年 (1686) = 四臂合掌の青面金剛 Fig.8

中田切 38 白山神社貞享 4 年 (1687) = 六臂合掌の青面金剛

・旧印旛村の古い庚申塔

吉高 十三仏板碑付近の元禄 13 年 (1700) = 青面金剛像 光背型

造谷 宝永 3 年 (1706) 銘=笠付型青面金剛像 Fig.9

## (2) 北総と印西市域の「百庚申」

江戸中期終わりの寛政期 (1790 年代) のころから、下総地方の庚申塔は、青面金剛像塔から三猿付文字塔に替わり、後期前半は「青面金剛」の主尊名、文政期頃からは「庚申塔」銘の文字塔となりますが、印西市域の庚申塔で特異なのは、江戸後期から近代にかけて建立された「百庚申」です。

百庚申は、一石に「百庚申」銘や「庚申」などの文字を多数刻んだ「一石百庚申」と、百基または多数の庚申塔を一か所に造立する「多石百庚申」があり、その目的は祈願のための供養は数多い方が有効との「数量信仰」に基づくといわれます。

多石百庚申は、筆者の調査では、千葉県内に 42 例あり、この中で、多石百庚申の先駆けとなるのは、文政 12 年 (1829) の印西市松虫の百庚申で、青面金剛像塔 100 基を一時に建立し、灯籠一対も奉養しています。(現在は都市開発で、松虫寺近隣の路傍 2 か所に分けて移動されています)

続いて柏市域など利根川流域で、天保年間から幕末にかけて、数多く建立されますが、像塔の割合は文字塔に比べて少なくなり、やや大きめの像塔 10 基と定形の文字塔 90 基がセットの百庚申が主流となります。印西市武西と浦部はこのパターンで、文字 9 基おきに像塔 1 基を配置する建立当時の姿を今もよく伝えており、文久 3 年 (1865 年) の造立の「武西の百庚申塚」は、平成 11 年 3 月に印西市の指定文化財 (記念物・史跡) になっています。



Fig.10 武西の百庚申塚 (1862)



Fig.11 浦部の百庚申 (1839)

一石百庚申は、群馬県倉沢に一石に百体の青面金剛像を浮彫りした寛政 6 年銘 (1792) 「百体青面金剛塔」や、長野県野底に「奉請一百體庚申」の主銘の周りに、「庚申」の文字を百の異なった書体で表した安政七年銘 (1860) の「百書体庚申塔」ほか、万延元年 (1860) 前後に群馬県・長野県・福島県などで「百書体庚申塔」が流行しています。

北総では一石百庚申の数は 11 例と少ないですが、多石型に先立って主に文化文政年間に建立され、印西市松崎火皇子神社の「庚申百社参詣供養塔」銘は、百庚申信仰の由来を推定させる銘で庚申塔百社の参詣成就を意味し、北総の多石百庚申建立の理由がうかがえます。また百体青面金剛塔や百書体庚申塔を簡略化した「百体庚申」銘のもの、「百庚申」の主銘のみのものなどがあります。

## (2) 十九夜塔

関東北東部では、旧暦 19 日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、如意輪観音の坐像や掛け軸の前で経文、真言や和讃を唱える「十九夜講」が盛んに行われていました。

この十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」であり、右手を右ほほに当てた思推相で右ひざを立てて座る姿の如意輪観音像が主尊として彫刻されます。

十九夜塔の発祥としては、茨城県つくば市平沢の八幡神社にある雲母片岩の石塔 (Fig.12) が、稚拙な仏像らしき座像と「寛永九年 (1632) 三月十九日」の銘が刻まれていることから、これが最古と推測されています。

千葉県では承応元年 (1652) の香取市結佐大明神境内の「十九夜侍之供養 / 十二月十九日」銘の宝篋印塔の残欠が古く、次いで、明暦元年 (1655) 造立の芝山町加茂普賢院の「十九夜待」銘のある六地藏立像石幢、3 番目は、万治 2 年 (1659) 山武市本須賀大正寺の「十九夜念佛」銘の宝篋印塔で、このころまでは十九夜の講も念仏講と不可分であり、また主尊も定まっていなかったようです。



Fig.12 つくば市 (1632)



Fig.13 利根町 (1658)



Fig.14 山武市 (1663)



Fig.15 小倉青年館 (1665)

如意輪観音を主尊とした十九夜塔の初出は、茨城県利根町布川の徳満寺に万治元年 (1658) に造立された 4 手の如意輪観音像を線彫りした板碑型石塔 (Fig.13) ですが、如意輪観音像を舟型光背に浮彫りした典型的な十九夜塔が出現するのは、万治 3 年 (1660) 千葉県山武市戸田の金剛勝寺の二臂像の石塔 (Fig.14) からとなります。

寛文期に入ると、寛文 3 年 (1663) 山武市松ヶ谷の勝覚寺 (Fig.14)、寛文 5 年 (1665) 印西市小倉青年館の石塔をはじめ、寛文 10 年 (1670) まで千葉県内で 38 基が造立され、さらに寛文 11 年から延宝 8 年 (1680) までの 10 年間の数は 125 基を数えます。そのうち旧印西町は特に多く、近隣の印旛地域の中核となる地域でした。

### ・旧印西市内の十九夜塔 (如意輪観音) 江戸初期から中期への変化

小倉青年館の寛文 5 年 (1665) = 市内最古 二臂像 Fig.15

別所地藏寺の寛文 8 年 (1668) = 厳めしくたくましい二臂像

和泉青年館の寛文 8 年 (1668) = 厳めしくたくましい六臂像 Fig.16

古新田青年館の寛文 8 年 (1668) = 天蓋のある如意輪観音

小林光明寺の寛文 9 年 (1669) = 一部透かし彫りの六臂像 Fig.17

戸神青年館の寛文 12 年 (1672)、 竹袋観音堂の寛文 13 年 (1673)  
 和泉会館の延宝 5 年 (1677) =たおやかな腕の六臂像  
 大森古新田青年館の天和 2 年 (1682) =沈思黙考の二臂像  
 和泉会館 元禄 5 年 (1692) =天衣をまとう二臂像  
 大久保勢至堂 元文元年 (1736) =未敷蓮華を持つ二臂像  
 小林光明寺 天明 2 年 (1782)、 宗甫観音堂 天明 2 年 (1744)  
 中央公民館前 寛政元年 (1789) =「江戸道」道標の二臂像 Fig.19

・旧本埜村の十九夜塔

中根福聚院 寛文 9 年 (1669) =一部透かし彫りの六臂像 Fig.18  
 押付大師堂 寛文 10 年 (1670)、 将監密蔵院 寛文 10 年 (1670)  
 中田切白山神社 寛文 13 年 (1673)、 松木 8 墓地 延宝 3 年 (1675)



Fig.16 和泉青年館 (1668)



Fig.17 小林 光明寺 (1669)



Fig.18 中根 福聚院 (1669)



Fig.19 中央公民館前 (1789)

・旧印旛村の十九夜塔

山田 円蔵寺 寛文 6 年 (1666)、 松虫寺 寛文 8 年 (1668)  
 吉高 公会堂 寛文 9 年 (1669)、 岩戸 広福寺 寛文 9 年 (1669)  
 萩原 1531 墓地 寛文 9 年 (1669)、 平賀 観音堂 寛文 12 年 (1672)  
 造谷 真珠院 寛文 12 年 (1672)、 平賀 3139 墓地 寛文 12 年 (1672)  
 鎌苅 東祥寺 文政 10 年 (1827) =化政期の凝った二臂像 Fig.20



Fig.20 鎌苅 (1827) ⇒

### (3) 子安像塔

「子安塔」とは、子授け・安産・子供の健やかな成育を祈願するために、「子安講」などに集うムラの女性たちが造立した石塔や石祠をいいます。

私は、母性を明らかにした主尊(神仏)が子を抱く像を「子安像」、その像容を刻んだ石造物を「子安像塔」とよんでいます。その像容は、江戸時代の地域の民俗信仰に由来し、仏典などの儀軌にはないオリジナルな石仏です。

#### 北総の子安像塔

##### 1. 北総の女人講に関わる石造物の分布とその時代的推移

北総(下総地域)、特に八千代市など印旛沼周辺から利根川下流域は、女人講による子安像塔の数が多き地域で、1000基以上の子安像塔があります。そのうち記年銘のある塔は、江戸中期(1717~1803年)までが109基、江戸後期前半(1804~1843)175基、江戸後期後半(1844~1867)120基で、江戸時代計は404基、明治からの近・現代では525基、総計934基が現存しています。

北総の女人講関連石造物は、江戸初期~中期(17世紀後半から18世紀代)にかけてほとんどが如意輪観音像の十九夜塔で、推定1200基以上あるのに対して、子安像塔の建立数が月待塔の数を上回るのは幕末以降であり、近代になって爆発的に増えます。

##### 2. 子安像塔出現期の像容の特徴と系譜

千葉県最古の子安像塔は、上総の袖ヶ浦市百目木子安神社の元禄4年(1691)の「子安大明神」石祠 Fig.22 で、①二児を配した子安像が②石祠内にあるという特徴があります。

北総では、酒々井町尾上神社の享保18年(1733)「子安大明神」銘の立像 Fig.22 が初出で、これに次ぐ元文5年(1740)酒々井町の子安像石祠 Fig.23 は①と②の特徴をもっています。

同じく酒々井町尾上住吉神社の宝暦元年の子安像塔 Fig.24 は③思惟相型の如意輪変形像で、①②③の特徴は北総の江戸中期子安像塔のもつ特異な要素となっています。酒々井町では18世紀末までに8基の建立があり、ここから隣接する旧本埜村・旧印旛村・成田市へ広がる様相が確認できます。

以上から江戸初期に上総で発祥した子安像塔は、約半世紀後の江戸中期に酒々井町に現れて北総各地に広がったと推定されます。



Fig.21 袖ヶ浦市元禄4年(1691)



Fig.22 酒々井町享保18年(1733)



Fig.23 酒々井町元文5年(1740)



Fig.24 酒々井町宝暦元年(1751)

### 3. 江戸時代後期から近現代までの子安像塔の特徴

後期前半（文化文政・天保期）に、千葉市・佐倉市・印旛村・佐原市などで増加し、印旛沼西端の白井市・八千代市・印西市・船橋市にも広がりますが、江戸川べりの浦安市・市川市・流山市などでは全く建立されません。近・現代は、白井市・八千代市・印西市・印旛村・千葉市などの地域に偏って分布しています。

江戸後期からは主尊が未敷蓮華を持って半跏坐で正面を向き授乳している像が主流となります。優雅に天衣をまとう像や、子が這い上がろうとする動的な表現など、華麗で円熟した作がある一方、軟質石材の安易な彫りも多く、保存状態はよくありません。

近代は、豊満さを強調した母子像や、細部まで像容を同じくする意匠の定番化がみられるようになります。



Fig.26 平賀 不動堂 (1764)

### 4. 「子安像塔」成立の背景

元禄から寛延年間に、「子安大明神」石祠や「子安観音」石仏などの子安像塔が生み出された背景には、ムラに伝わる古来の子安神信仰と、十九夜念仏や月待ちの女人講の習俗、石仏を彫る技術の普及、「慈母観音」像の特徴である「子を抱く像」への女性たちの共感がありました。

慈母観音像は、16～17世紀初頭、中国で「送子観音」と「白衣観音」が融合して成立し、日本にも多量に輸入された白磁製の像で、母性愛と心の癒しを与える具象的な像であったことから、17世紀半ば、「子安観音」として各地方に普及、浸透していったと考えられます。

### 印西市内の近世後期以前の子安塔

#### ・子安神の石祠・文字碑（旧町村別）

印西	宮内 鳥見神社	元文 3 年 (1738)	= 「子安大明神」 石祠	Fig.25
印西	松崎 火皇子神社	寛延 3 年 (1750)	= 「子安大明神」 笠付角柱型	
印旛	山田 宗像神社	寛延 3 年 (1750)	= 「子安大明神」 石祠	
印西	白幡 八幡宮	宝暦 12 年 (1762)	= 「子安大明神」 石祠	
印旛	瀬戸 宗像神社	安永 3 年 (1774)	= 石祠	
印旛	吉田 宗像神社	安永 4 年 (1775)	= 笠付石祠	
印旛	師戸 宗像神社	安永 4 年 (1775)	= 唐破風型石祠「子安大明神」	
本埜	竜腹寺 日枝神社	安永 5 年 (1776)	「子安□□□□」 石祠	
印西	明神前 宗像神社	寛政 10 年 (1798)	「子安大明神」 石祠	



Fig.25 宮内 鳥見神社 (1738)

#### ・子安像塔（旧町村別）

本埜	行徳 稻荷神社	宝暦 5 年 (1755)	「十九夜念仏講中」 ③思惟相型	
印旛	平賀 不動堂	明和元年 (1764)	「念仏講中善女」 ③思惟相型	Fig.26
印旛	平賀 観音堂	明和元年 (1764)	「(女) 講中」 ③思惟相型	
印旛	鎌苅 東祥寺	明和 5 年 (1768)	「普門品供養・・・」 墓標仏 上部欠	
本埜	滝 瀧水寺	安永 5 年 (1776)	「子安観世音」 ①二児型	Fig.27
印旛	岩戸 西福寺	安永 5 年 (1776)	「講中」	Fig.28

本柱	下曾根市杵島神社	安永 8 年 (1779)	「十九夜塔」①二児型
印旛	岩戸 高岩寺	天明 4 年 (1784)	「十五夜」 Fig.29
印西	松崎 火皇子神社	天明 7 年 (1787)	
印旛	吉高 大日堂	天明 8 年 (1788)	(村名)
印西	鹿黒 火の見下	享和 2 年 (1802)	「講中」
印旛	岩戸 高岩寺	享和 3 年 (1803)	「講中二十七人」
印西	宮内 鳥見神社	文化 3 年 (1806)	②石祠内に浮彫像 Fig.30
本柱	角田 薬師堂	文化 9 年 (1812)	「子安供養塔 講中」
印旛	吉高 公会堂	文化 15 年 (1818)	
印旛	岩戸 高岩寺	文政 2 年 (1819)	「子安塔」未敷蓮華をもつ Fig.31
印旛	岩戸 広濟寺	文政 6 年 (1823)	「子安大明神 女人講中」
印西	小林 光明寺墓地	文政 8 年 (1825)	「女講中」
印旛	瀬戸 徳性院	文政 10 年 (1827)	
印旛	山田 集会所	文政 11 年 (1828)	
本柱	角田 薬師堂	文政 13 年 (1830)	
本柱	行徳 稻荷神社	文政 13 年 (1830)	



Fig.27 瀧水寺 (1776)



Fig.28 岩戸 西福寺 (1776)



Fig.29 岩戸 高岩寺 (1784)

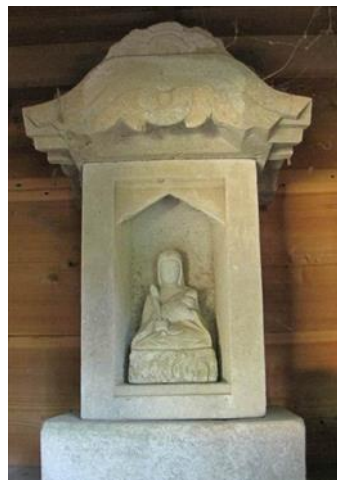


Fig.30 宮内 鳥見神社 (1806)



Fig.31 岩戸 高岩寺 (1819)

参考資料

- ・印西町教育委員会 『石との語らい』平成 4 年
- ・榎本正三『女人哀歓一利根川べりの女人信仰』 崙書房
- ・蕨由美「北総の子安像塔の系譜＝江戸時代中期におけるその出現と成立について」2010 年『房総の石仏』第 20 号
- ・蕨由美「印西市域の庚申塔と十九夜塔および子安塔について」2015 年『印西の歴史』第 8 号
- ・蕨由美「印西の十九夜塔と子安塔探訪」2015 年『日本の石仏』154 号
- ・蕨由美「印西市域と北総の百庚申について-最近の調査と知見から-」2017 年『房総の石仏』第 20 号